

都市の保育に必要な保育環境と教材

松 村 光 子

はじめに

現在は、都市への集中化を排する新しい都市計画がいわれ、産業の合理化、機械化が著しく進み、加えて交通の便、マスキミの浸透力などで、都市と他の地方の生活の格差が急速にちぢまっていきつつある。日本全国の施設における保育環境もその差は次第に減少していく現状であるが、その格差のちぢまり方は双方から歩みよってというよりは、多くは地方が都市化の方向へ向かっているとはいえる。そこで都市の子どもの生活の特色を捉え、その面からのぞましい保育環境及び教材、教具について考えることは、全国の、とくに今後の保育にとって意義深いと思われる。

◇ 都市の子どもの生活の特色

ここで、私が経験した例から、都市の子どもの生活の一端にふれてみる。

数カ月前、夏休みの過ごし方について子どもたちと話し合いを

していて、たまたま「虫とり」に話が及んだ。都会に飛んでいる数少ない虫を子どもたちが夢中になって追いかけるのは何時の年も変わらないのであるが、最近ほとみにその虫も減ってきている。「虫にもいのちがあること。自分のいのちをせい一ぱい生きようとしていること。捕えてよくみたら逃がしてやること」などに話をまとめていると一人の子どもが、

「デパートで買った虫も夕方になったら逃がしてやるんでしょう？」とたずねた。

多くのことを加えるまでもなく、人間疎外が云々される生活が、日に月に尖鋭化していく都会にあって、子どもたちの生活からは子どもをとりまく自然が日に日に姿を消していき、前記の子どもの質問も極く当たりまえに生じる状態が成立している。

コンクリートの冷たさは知っていても、土のあたたかさを知らない子ども、すみきった空の色をしらない子ども、玩具といえは

着色された定形のものしかない子ども、静寂を知らない子ども、自動車はこわいものと教えられる子ども、おたまじゃくしや金魚は飼えるけど、犬・猫は飼ってはいけないと思っっている子ども、知識をテレビから得て、自分でためして知ろうとしない子ども、労働をいとう子どもなどが否応なくふえていく。

一方、たえない都会の刺激の中に育つこれらの子どもたちは、敏感ですばやく行動する。反射的行動の早さ、するどい感覚、知的なものへの強い興味と理解の良さ、同化力、適応の早さ、早くからのびている社会性、などをもつのも都会の子どもたちである。

このような子どもたちの生活の特色をふまえて、次の四点から都市に必要な保育環境について考えてみよう。

(一) 都市の生活に欠けているものを補う保育環境

那会の子どもたちにとって先ず最も欠けているものは自然環境である。

豊富な土壌、広い花壇、島、多くの草花、大小の樹木、小動物の飼育設備等、これらの設備が十分に用意されるなら、少なくとも、デパートで虫を買ってくることに不審を抱かない子どもたちの生活感覚が助長されやすむだろう。

全園庭にはいかになくとも庭の一隅に、自然の庭をつくってはどうか。山あり、谷あり、坂あり、木の株、木の根、石こ

ろ、水たまり、穴、草むらなど、山野の自然のさまをそのままちこんだ自然の庭は、子どもたちの心身の活動を容易に誘い、遊びが豊かに発展するだろう。石を除き、土をほり返して、幼虫や成虫をみつれたり、泥んこの中からなかなかぬけ出せなかったり、日の暮れるまで、つみ草や虫追いに興じた思い出をもつおとなたちにとって、それが楽しかったのは、単に郷愁からだけではなく、それらの遊びの中に発見があり、次の遊びへのつきない誘いがあったからである。大自然の中で、息をこらし胸をはずませ、力をぬいたり、いれたり、全身心を働かせて変化させることの出来る自然との遊びのおもしろさは、出来上がった玩具からは得られないものである。

わたしどもの園には樹木が多い。ある年の台風でその数本が倒れた。その木は現在も横倒しにしてあるが、枝がつきでて、ふしのあるあらわれたその枯木は、子どもたちの恰好の遊び場になる。ゆすれば動く、枝をにぎるとかすかな抵抗がある、ふしを注意しないと足がひっかかるなど。これらは固定されていた、いつも同じ表情で動きのない鉄製のジャングルジムなどからはもたらされない心身の働きを誘う。

都市では、既成の遊具施設をそなえると同等の重みを、土を求め、樹木を求めることにおくのも大切なことである。

素朴な環境の中から子どもたちは、くふうすること、苦心して創造すること、生きものの生命力を知り、感動のよろこびなどを

知る。そして人間の知恵を学びとる。

(二) 都市の生活では経験しにくく不足がちな

活動を補う保育環境

都会の限られた生活環境の中では経験しにくい活動を、誘い出し助長し、慎重かつ活発な行動性を育てるための施設を考えてみよう。

はう、つかまる、よじのぼる、すべる、ころがる、バランスをとるなどの各種のプレイ・スカルプチャーが最近ぼつぼつ設置されてきているが、子どもの園にあるスカルプチャーには、三歳児から年長児までいつもむらがつて前述の動きを楽しんでいる。高さ二メートル以上、それも球型をなしている頂上で身体のパランスを自然によくとり、三歳児が危げなく追いかけたりする。

また、自動車の古タイヤを園庭に縦横に埋めてつくった遊び場も子どもたちの人気を呼んでいる。タイヤプランコなどは、今日では都会的な遊具としてあげられる代表的なものである。

次に、運動量の自ら制約をうける都会の子どもたちを対象に最近、体育遊び、体力促進と称して各種の体育器具・遊具などが数多く市販されているが、そのすべてがぜひ必要なものとは思われない。その中には永遠性の乏しい、思いつきのなもの、その場的なもの、または粗製のものも多い。

保育者が幼児期にどれだけの基礎的活動が必要であるかをはっきり押えて選択するのではないと単に目新しい経験、商策にあやつ

られた結果にしかならないことに特に留意すべきである。

(三) 都市の生活に即した保育環境

北欧には何でもしてよいというガラクタ庭を具えている幼稚園がある。また、アパート生活の多い子どものために児童工作遊園という、家庭では許されないことができる施設がある。子どもたちはそこで、古木材を組み立てて、自分たちの家を作り、生きものを飼い、草花を育て、きまりをつくって自分たちの生活を築いて楽しむ。物を投げる、火をつかう、物をもやすことも監督者のもとでやっていた。

都市の生活には制約や制限が多い。子どもたちの心身とそれらの制約は少なからず影響を与えている。ひどく萎縮している子ども、爆発的な子どもなど最近はその極端な例がふえている。子どもたちが保育施設にきて、何でもしてよい一隅があったらと思うことも多い近頃、これは今後の課題として考えていることである。

次に、都会の避けられない現象の一つに交通禍がある。電信柱の長い影が地面にうつって…などは昔語り、とにかく子どもたちは、道をおちおち楽しんで歩いてはいられない。

園内に、交通遊びの用器具をそろえて、歩き方、渡り方、避け方の訓練をする施設も少なくない。こうした都会の現象は激化する一方であるから、交通面での教具を一通りそなえることは必要であろう。ただ、こうした訓練をする時、保育者が心したこと

は、車にひかれなければならないためにと、受身、消極的な行動をとってやる方向に向けて終るのでなく、人命尊重、人間優先、車に人が使われるのではないことを、あわせて繰返し知らせることが大切であろう。

(四) 都市の生活をよりすぐれたものにすめる保育環境

動物園、植物園、遊園地、博物館、プラネタリウム、児童劇場、デパート、各種のショー、テレビ番組の公開など、都会の子どもたちの関心をひき、興味を充たす文化的施設は大都市になるほど数多くあり、子どもたちにとって知的な刺激は事欠かない。保育施設にも各種の設備を整えてのデラックス化が漸増しているとき。都会の子どもたちのさかんな知識欲をよりみだし、よりのばすという狙いはまちがっていないが、過ぎたるは云々といわれまでもなく、すでに過剰気味な日常に加えて、保育施設までもそれに近く整えられ、それにとり囲まれる生活は子どもたちにとってどんなものだろうか。欠けているところに発見があり、それを充たすための活動に意義あることにも保育者は心したいものである。ただし、子どもたちに芽ばえ、育っていく興味と正しい方向を示し、すじ通をつけていくための玩具、教材類は豊富に用意しておきたい。図書類、図鑑類、スライド、レコード、簡単な器具(温度計、虫めがね、はかり、ものさし、分類箱、採集用具)など。子どもたちの動きにはすぐにも応じられるように整えておきたい。もとより何もかもを室内にならべておくのがのそましい環

境づくりではない。都会の子どもの感覚は周囲にあるものの色彩、形態によってのみみがかれていく。保育室内等の構造に、色彩調節に十分な配慮を計りたいものであるが、折々、色彩豊かな保育室にあって、保育者を含めて子どもたちが揃って暗い色のスモックを着ている場面に出あうことがある。東欧・北欧の社会保障による保育施設をみたが、日本のような現象はまわった範囲ではみられなかった。美的感覚を養い、清潔感を育て、個性を尊重することからもこの日本独特の同色同型の上衣は考え直してよい時期にきているのではなからうか。

現在は地方が都市化に向かっていっていると最初に述べたが、書きあげてふり返ってみると都会の生活は自然に戻るべきであると提言しているかの如くになった。このことの是非は読者の判断にまかしたい。

|| おわりに ||

この表題が編集部から送られてきた時、私は一瞬、昨年訪問したウィーンの幼稚園を思い出した。その園では、リズム遊びのリード楽器がピアノでもレコードでもなく、保育者の吹く笛と、音の美しいタンバリンだけであった。日本では到底考えられない静けさの中でリズム遊びは楽しげに進んでいた。おだやかな保育者の声、室内にひびくやわらかな笛の音。あの静寂さこそ、今の日本の都会の子どもたちにはぜひとも必要な保育環境ではないだろうかと思うのである。

(鶯谷さくら幼稚園)